【ポスター発表】

日本におけるスウェーデン発音楽ケア「ブンネ・メソッド」の導入と展開

－福祉・教育現場における音楽療法の一例として－

○　大妻女子大学　　村田　真弓（8004）

キーワード：ブンネ・メソッド　幼児音楽教育　ノーマライゼーション

１．研 究 目 的

音楽療法とは、「音楽のもつ、生理的、心理的、社会的働きを用いて、心身の障害の回復、機能の維持改善、生活の質の向上、行動の変容などに向けて、音楽を意図的、計画的に使用すること」（日本音楽療法学会による音楽療法の定義）といわれている。

音楽療法にはレクリエーションなどを主とするストレスケアや緊張緩和、教育効果の援助等を目的とする広義の意味と、治療の視点を有する狭義の意味をもつ場合とがあり、Carter.S(1982)によればその本質は「医療を達成するための音楽活動、もしくは音楽の科学的応用」である。この場合、日本では期待される効果に基づいて音楽療法士による主導が一般的であり、何らかの評価方法を用いた効果測定が必要となる。ブンネ・メソッドはその目的に応じていずれにも適用することが可能である。

ブンネ・メソッドとはスウェーデンの音楽療法士ステン・ブンネ氏により考案された音楽ケアの方法である。ブンネ・メソッドで用いる楽器は、個人が抱える障害や発達の程度に関わらず演奏することができ、音楽を通じた個人および集団の成長目標に添って働きかけることができるのが特徴である。日本には 2009 年に導入され、主に高齢者福祉領域を中心に展開されている。本研究はこのブンネ・メソッドの特徴を概観し、幼児教育現場における取り組みをとおして、ノーマライゼーションの理念に対する本方法の意義について考察することを目的とする。

２．研究の視点および方法

初めに日本におけるブンネ・メソッドの展開拠点である（株）ブンネ・ジャパンが発行している文献および公開資料をもとに、本方法の特徴を概観した。次に高齢者福祉現場における展開に関する先行研究を踏まえたうえで、幼児教育現場における展開に関しては日本国内における先行研究が見当たらなかったことからインストラクター有資格者の取り組みを紹介し、考察した。

３．倫理的配慮

本発表においては日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて、文献と資料を取り扱った。また幼児教育現場での取り組みを報告するに当たっては、対象者個人が特定されないよう

配慮した。

４．研 究 結 果

ブンネ・メソッドとは幼児教育、障害者ケア、認知症高齢者ケアなど様々な対象者を想定して行われている「参加型音楽ケア」である。専用に開発された楽器を用いることで、これまで楽器を演奏したことのなかった児童や障害者、高齢者などが演奏を楽しみ、自己を発揮しながらグループでの調和を図ることができるようになる。また、この楽器を使うことによって利用者と施設職員が共に有意義な音楽の空間を作り出すことが可能となる。

本方法のもう一つの特徴として、サウンドストーリーの創作が挙げられる。与えられた楽器で作られたメロディーをたどるのではなく、物語のなかに登場する音をグループ全体で想像し、即興的に創作していく。これらのことから、音楽をひとつのツールとして、感性・社会性・想像力の向上、身体機能の維持や活性化が促される。

ブンネ・メソッドの演奏は以下の内容で構成される。初めにリーダーが物語を語りながら、効果的に歌や音を挿入する。次に、その後に続く物語を参加者とともに即興で作っていく。最終的には、全員で一連の物語を完成させ、演奏する。その際は参加者が音を鳴らすところでは伴奏を完全に止めることで、参加者がストーリーの展開に貢献している実感を得ることができる。こうしたプロセスを通して、音楽に合わせて自由な発想を持てるようになったり、個人レベルと集団レベルの双方において様々な成長目的に到達することができるようになる。

幼児教育現場における取り組みを以下に紹介する。幼児クラスで音楽を取り入れる場合、担任はピアノを演奏し、園児たちがそれに合わせるというのが一般的である。しかしブンネ・メソッドの場合はピアノ伴奏が必要ない。また伝統的な楽器演奏の場合、初めにドレミ法に関する知識が必要となる。しかし、ブンネ・メソッドで用いる楽器の場合は、色で音階が識別されているため、思い描く音色を容易に表現することが出来るなど、楽器演奏の柔軟性に大きな違いがある。

５．考 察

音楽療法の効果はすでに様々な医療・福祉現場で検証されている。ブンネ・メソッドを取り入れるにあたっては新たに専用の楽器を導入しなければならない点が懸念事項と考えられる。しかしこの楽器を用いることで、認知症レベルや障害程度、児童における発育発達の程度に左右されることなく協働で取り組むことが可能であり、こうした経験の積み重ねによってノーマライゼーションの理念が体験的に理解できると考えられる。

今後、本方法を活用した音楽ケアが更に広まり、年齢や障害の枠を超えてセッションすることによってノーマライゼーションの理念が広く浸透する一助となることが期待される。